

私の大学人としての国際標準とのつきあい方

国立大学法人北陸先端科学技術大学院大学 副学長 教授 たん やすお
丹 康雄



私が国際標準と直接の関わりを持つようになったのは1990年代の半ばごろ、ホームネットワーク（以下、HN）に関する研究を始めたあたりからであるが、ITUとの関わりは宅内フォーラム（正式名称は宅内情報通信・放送高度化フォーラムで1998-2004に活動し、その成果はTTCの次世代HN専門委員会（現IoTエリアネットワーク専門委員会）に継承）におけるHNアーキテクチャの勧告化の作業が最初であった。学部生時代は情報通信というよりも情報処理に対する興味が強く、研究室でCCITTだのCCIRだのといった話が出ていても自分には関係ないものだと思っていたのだが、ComputingとCommunicationの融合の流れは急速に進み、博士後期課程のころには概要程度は認識するようになっていた。ITU-T J.190: Architecture of MediaHomeNet that supports cable-based servicesは、宅内フォーラムの最大の成果であると考えているが、初版を2002年に勧告化した作業に関わり、その後、想像以上に急速にIP接続される家電が増えたことを受けて2007年に改定した際には、エディタをつとめることになった。NECマグナスの松本檀さん、KDDIの宮地悟史さんはじめ、周囲の方々には大変お世話になった。

このJ.190はいわゆるアーキテクチャ標準ということで、個別の技術規格とは異なるものである。2000年前後のIPv6フィーバーでは家電にもIPアドレスを振って、単一プロトコルですべてがつながるのだという論調が主流であったのに対し、J.190は家電の分野（生活家電であるとか映像音声を扱う家電であるとか）によって最適な技術は異なるため、それを積極的に認めた上でIPベースの家庭内ネットワークで統合する形が適切であるとしており、現在においても有効なリファレンスとなっている。特定の目的の技術に関する標準ではなく、こうした、いわば間接的な技術の標準に携わることで、自分自身の標準に対する認識を大きく改める機会を得たのに加え、大学人という中立の立場であるからこそ貢献できる場面があるということも体感することができた。

ところで、このJ.190については成立後に、日本国内のIECの委員会の方からお叱りを受け、ISO/IEC JTC1 SC41の重鎮からも苦言を呈され、さらにはなぜSG9でやったのかとITU関係の方々からもご批判を受けるなど、しばらく怒られるのが仕事になっていたが、これを通じて過去の経緯、標準化団体間の位置関係の理解が進んだとともに、多くの人脈を得ることができた。怒られたときにはお話をしっかり伺い、趣旨を理解して対話をしていけば、その後はむしろ強力な仲間となっていただけだ。当時はまだ若手であったことや、バックに力のある組織のついていない人間であることから、皆様から忌憚のないご意見を伺えたのであろう。

こうした経緯もあり、私の場合、大学での研究成果である技術を標準規格に提案する、という形の活動はあまり行っていない。どちらかという、俯瞰的に全体を捉えて分析を行ったり、標準化の方向性や、他組織との連携を図るところに大学人としての中立性が生きるものと考えている。もちろん、先端技術、特に数学的な要素の強いものなど専門性が高い技術については大学の研究が直接役立つこともあるし、大学にも知財や起業が求められるようになってきた昨今においては企業に近い活動のしかたもあろう。

逆に、大学の教育研究における国際標準の活用については、工夫の余地が大きいものと思われる。確かに学術論文と標準文書とのギャップは小さくないが、実際の製品やサービスと直結する標準文書は大学での研究の位置付けを明確にしたり、新たな研究テーマを見つけるのには有効なものとなろう。

最後に、大学における標準化人材の育成というテーマは社会的な要請も大きいものではあるが、一筋縄ではいかないことも確かであり、勝ち目のある方法論が必要となる。これについては2023年度にTTCでキャパシティビルディングアドバイザリグループを組織し、その成果の実用化に向けた活動が総務省との連携も含めて進んでおり、今後に期待されたい。